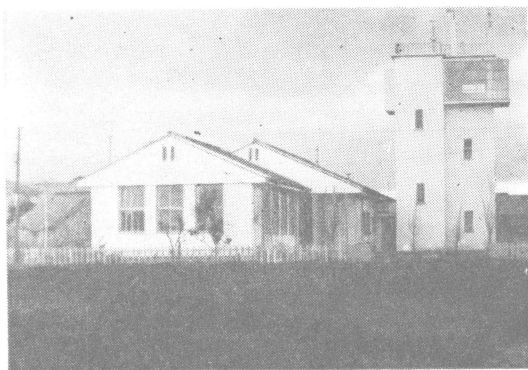


地方だより

津 測 候 所

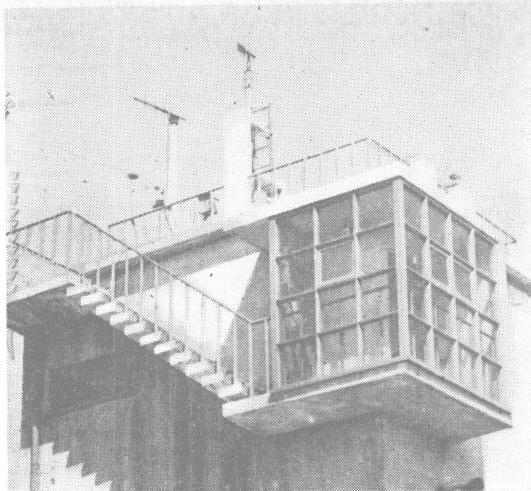
津市は面積81平方キロ、人口11万で明治22年4月1日に市制実施をみてから今年には67回目の誕生日を迎えたわけである。戦災により市のほとんど大部分は焼土と化し、中小都市として、これ程までの痛手をこうむった街は全国でも珍しかった。当時の人口はわずか7万に足りなかったのである。それ故、復興の運びも決して早くはなかった。戦後10年を経て漸く50m国道を中心軸とした、近代的都市計画の実が結びはじめた。焼かれた都市の強身とも言おうか、焦土には広壯雄大な都市計画を思いのままに遂行出来たのであった。かつての古い暗い町の姿、ゴミゴミした繁華街は消えて、近代的繁華街が出現し、街にはエアコンプレッサーの音が今日もまたけたたましいのである。



津測候所もその観測開始は、奇しくも市制実施の年に当る明治22年7月からで、70年間になんとなすほう大な資料は、最近の水利水害対策に大きな役割を果たしてくれた。

昭和28年8月新装なった庁舎は、名実共に府県予報区測候所としてふさわしいもので、建設の功労者である山口所長自慢の風力塔には、笠取山雨量ロボットからの送信電波をとらえる八木式アンテナが鈴鹿、布引山系地帯の雨量ににらみをきかせている。3階は四方総ガラス張りで観測には好都合に設計せられている。かくて所員16名の気勢も大いに上りつつある。

もともと津市は、藤堂高虎公35万石の城下町として発達して来たのである。かつては日本三津の一として商船等の輻湊したであろう津港は、明応年間の大地震のため堆砂に埋り、景勝をうたわれた安濃の松原も、その時20町にわたる陸地と共に海底に没したことが『勢陽五鈴遺



響』にみえている。この時に遠浅で有名な現在の津海岸が形成せられたのである。昭和28年の台風13号はここにも容赦なく大高潮を見舞わせた。白砂青松で知られた伊勢の海にも、これ以来えんえん数十軒に及ぶ大堤防が建設せられ、昨30年夏の津市中河原海岸女学生遭難事件に際しては、報道陣の車がこの堤防の上をしげく行ききしたのも、時代の推移を物語るものであろうか。

最後に西条八十の作になる『伊勢津小唄』を紹介して筆をおく。

伊勢の津の津の、津の街見れば
海はしろがね、いらかは黄金
吹くは五十鈴の、エー
吹くは五十鈴の、神の風

伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ
アコギ、ニエザキ松原三里
飛ぶは千鳥の、エー
飛ぶは千鳥の、波の花



(写真と文、 嵐田義一)